

「日本写真保存センター」調査活動報告(22)

写真原板の利活用を促すフォトアーカイブの構築へ

松本 徳彦 (副会長)

写真保存センターの収蔵作品によるデータベースが間もなく稼働し始める。

保存センターの役割は、時代を色濃く捉えた歴史的、文化的に貴重な写真の原板(フィルム・ガラス乾板)を収集・保存することである。と同時に写真原板の利活用を促進するためにデータベースを構築し、ネット上で多くの人が必要な画像を検索して利用が図れるフォト・アーカイブ化を目指している。

利活用は新聞、テレビ、出版などのメディアから、学術、教育機関での活用、行政や企業などでの広報活動にいたる広範囲な需要に応えられるよう活動している。将来的には全国に在る公文書館、図書館、美術館、博物館、郷土資料館などの収蔵写真資料との連携を図り、横断的な検索を可能にし利便性を強める。

日々の記録こそ残しておきたい

野水正朔さんが写真に興味を持ったのは、敗戦から間もなくの1952(昭和27)年であった。ようやく町に復興の兆しが見え始めた頃で、二眼レフカメラを肩に自転車で町を駆け廻っていた。そのとき太平洋戦争で戦死した夫の遺骨を胸にしっかりと抱いた夫人の葬列を見たときは胸を打たれた。これは撮っておかねばとかられて必死の思いで撮影した。心臓は動揺しカメラを持つ手は震えたが、これこそが歴史の一瞬と思い撮ったという。1956年のことである。以来、出来事はいま写しておかないと、記憶は消え失せてしまうとの衝動から、その時々の人々の暮らしや出来事を撮るようにしたという。

暮らしも落ち着きを見せ始めた1967年、高度経済成長の波に乗って、町の様相がどんどん変わって行った。中学生が関西方面に次々と集団就職していった。洲本港では担任の先生やクラスの仲間たちが別れを惜しんで見送った。汽船のスピーカーから「蛍の光」が流れ出すと、「しっかりねえ」「身体に気を付けてえ」と励ましの声が響き、五色のテープを引きずりながら汽船がゆっくりと港を離れて行った。

淡路島は人形浄瑠璃の発祥の地でもある。正月には人形役者が三番叟の人形を手に、村々の家を訪ね神楽を奉納して歩く。こうした伝統行事も時代の変遷とともに消えて行く。今では地元の中学や高校に人形浄瑠璃のクラ

ブがあって先達から指導を受け、伝統を守る若手が育っている。田植えや稲刈りのころには村人が総出で田んぼで汗を流す。ひと時の休息は村人たちの打ち解けた茶飲み話で団欒が和む。こうした古くからの暮らしの諸相もどんどん失われ、農機具ひとつとって

も機械化が進み、農村で働く人を見かけなくなっている。

「日本写真保存センター」では、こうした日本人の営みを記録した写真を集めている。祭りだけではなく、日常生活記録こそ残しておく必要があると積極的にアマチュア写真家の家を訪ね、お宝を探している。



別れ 洲本港で 1967年

野水正朔 (のみず・まさあき)

1932(昭和7)年 淡路島三原町で生まれる。52年頃から「淡路島」を撮り始める。55年、淡光会設立会員。68年兵庫県写真作家協会会員。70年写団あわじ設立会員。71年洲本市美術展運営委員。72年全日本写真連盟兵庫県本部委員。79年三原大学ゆづるは学園写真講座講師。92年兵庫県「ともしびの賞」受賞。93年二科会友。94年全日本写真連盟関西本部委員。写真集『淡國写真帖』を淡國書房から出版。



無言の帰還 1956年

若目田幸平―庶民の住む下町風情を記録する

2007(平成19)年平凡社から帯に、“豆腐屋カメラマンが撮った、ノスタルジックな1970年代の町と人の記録”と付けられた写真集『東京のちょっと昔―30年前の下町風景』が出版された。これは面白そうだ。直感が当たった。

目次に、第1章：下町の風景、2章：元気な子ども、3章：下町の暮らし、4章：祭りと盛り場、5章：路地と横町、6章：作る、商う、働く、7章：庶民の素顔、8章：70年代東京風俗。とある。これを見ただけで東京の下町、庶民の暮らしぶりが目に浮かぶ。

若目田さんは77年頃から『アサヒカメラ』の月例に応募され、自由の部で年度賞第1位をとられたベテランである。78年には雑誌『太陽』の太陽賞に「女たちの下町」で応募し、第15回準太陽賞を受賞する。爾来、『太陽』や『アサヒグラフ』『ドリブ』『歴史読本』『写楽』などで活躍するかたわら、85年以降、テレビCMに出演するなど多彩。93年ニコンサロンで個展「部屋」を催す。2007(平成19)年平凡社から『東京のちょっと昔』を出版。

この『東京のちょっと昔』を編まれたのは、『太陽』の元編集者だった西田成夫さんで、氏によれば、若目田さんは品川区二葉町商店街で豆腐屋を営み、早朝から商売に励み、昼過ぎから撮影に出掛けるという。東京の下町は戦災で焼けてしまったところが多いが、被災しなかったところも結構あった。なかでも現在東京スカイツリーで知られる押上近くの墨田区京島界隈には、古くからの木造造りの家並みが軒を連ね、路地や横町に惣菜屋や衣装、小間物屋などの日用品を売る店があって、庶民で賑わっている。典型的な下町風情が残っていてフォトジェニックなところである。

若目田さんはこの界隈に惚れ込み足げしく通い詰め、出会った人物と溶け合い、すぐにも談笑しながら、庶民の何気ない風貌や風情を捉えヒューマンドキュメントにしている。まさに普段着の世界を初詣から神輿、七五三などの行事に集う人物に視点を定め記録している。屈託のない人柄の良さからか、写した人の家にまで上がり込み、庶民の生活振りや生きざまを捉えている。そのスナップの的確さは鋭く、建物の構造から人物の服装、髪形まで、

子供たちの様々な遊びと、まさに図鑑をひも解くような描写が凄い。

まだ時代が若すぎるという人もいるが、こうした日々の記録こそコツコツと残しておかないと、心に触れる記録は残らない。その意味で野水、若目田両氏の写真原板が保存センターに多数寄贈されたことは、写真による風俗史構築の一步である。

【セミナー開催予告】

・関西地区初の「日本写真保存センターセミナー」

“渡辺義雄からのメッセージ～フィルム保存の重要性～”

日時：2016年11月25日(金)14:00～16:00

会場：大阪ニコンサロン・セミナールーム

大阪市北区梅田2-2-2 ヒルトンプラザウエスト・オフィスタワー13F

講師：松本徳彦(日本写真家協会副会長)

定員：80名(先着順 申込み制) 参加費無料

・PAGE2017 日本写真保存センターのセミナー

“あなたの写真原板の保存について…”

“写真保存センターのデータベースはどこまで活用できるか”

会場：池袋サンシャインシティ文化会館

開催日：2017年2月8日(水)予定 聴講無料

定員80名 申込順

お願い：

あなたの写真原板(フィルム、乾板等)は、大丈夫ですか？

現像済みのフィルムは支持体の性質上、時間が経過すると経年劣化が起きます。保管箱を開けて、酢酸臭がするようでしたら、ビネガーシンドロームが起こっています。

急いで、「写真保存センター」TEL:03-3265-7451 にお問い合わせください。



荒川(荒川区)の京成本線の高架下 1970～80年頃



町屋(荒川区)の金魚売り 1970～80年頃